別れの歌

福永武彦

随筆集

福永武彦

別れの歌

昭和四十四年　八　月二十五日　発行
昭和四十四年十二月　二　十　日　四刷

定価　六五〇円

著　者　福　永　武　彦

発行者　佐　藤　亮　一

発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新　潮　社
電話東京(260)一一一一(大代)
〒一六二　振替東京八〇八

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷　塚田印刷株式会社　製本　植木製本所

© Takehiko Fukunaga Printed in Japan, 1969

目次

別れの歌　7
追分日記抄　23
信濃追分だより　43
信濃追分案内　45　新緑　51
ノートラ　52　王様のお相手　54
ジンギスカン鍋　57　王様の行方　59
噴火　62　草軽電車　64
高原秋色　67　閑居の弁　70

キノコ　75
人とり川　76
某月某日　82
金魚とドジョウ　85
信濃追分と「菜穂子」　89
秋近く　92
石仏その他　96
山村閑居　99

信濃追分の冬　103

室生犀星　119

追憶小品　137

高村光太郎の死　139
神西清氏のこと　145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ゆうべの心　149
「我思古人」　152
天上の花　157

回想　165

知らぬ昔　167
独仏学院の思い出　177
厳しい冬　181

清瀬村にて　185

文学と生と　187

小山わか子さんの歌　195
白い手帳　202
散文詩二題　209
病者の心　215
飛天　225
プライヴァシィと孤独　233
日の終りに　239
掲載紙誌一覧
後記

福永武彦
随筆集

別れの歌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

堀さんの訃報は僕等をおどろかせ、悲しませた。しかし堀さんは必ずしも不幸な人ではなかったように思う。それは僕自身の回想の中にあって、堀さんと親しくすることの出来た軽井沢の夏が、僕自身の青春の悩みの多い日々に属していて、遠くから振り返ると、青春というものはただ一色に愉しく明るい色彩に思い起されるからなのだろう。それらの日々に、僕等は笑ったり泣いたりした。そして僕等はそれぞれ固有の生活を持ちながらも、堀さんをめぐって自分達の夢を育てていたような気がする。回想の中で、堀さんはいつも若く、にこやかに微笑していられる。文学的な影響というものは、恐らくは徐々に、半ば無意識のうちに滲透するものだろうが、堀さんのあの人間的な温かみはすぐさま僕等を捉えて離さなかった。都会的に洗練さ

れた趣味、愉しげな軽やかな座談、しかもお喋りというのではなく、正確に、言葉を愉しむように、そして間々の沈黙さえもが意味を持つように、交された会話、時々の皮肉めいた軽口、若い者に対する友達のような口の利きかた（堀さんは僕等に決して自分のことを「先生」とは呼ばせなかった。そういうしかつめらしいことは嫌いだった。だから多恵子夫人が、わざわざ悪戯っぽく「うちの先生が」などと口にされると、困ったようなにが笑いを見せられたものだ）、一度も機嫌が悪いとか、怒ったとかいう表情を示されたことはなく、にこやかな微笑が絶え間なく流れていた。堀さんが幸福な人だったろうという印象は、単純にそこから来ている。一人の作家の、作家としての内面の苦しみを、さまざまの資料によって研究し、露わに曝き出すことよりも、僕にはそう信じていることの方が愉しい。堀さんの書かれたものは必ずしも明るくはないが、堀さんという人は、病いがちの一生を通じて明るく愉しい人であったと、幸福な生涯を送られたと、そう信じたく思う。

二

堀さんに最初にお会いした夏のことを、思い出すままに書きしるしてみよう。それは堀さんの思い出というより、或いは僕と、僕の周囲にいた友人達との生活に触れることの方が多いか

もしれないが。

僕が初めて軽井沢へ行ったのは、昭和十六年の夏だった。その年の春、僕は大学を出て日伊協会に勤めていた。夏に取った休暇がいつ始まりどのくらい続いたかは明かでないが、恐らくは十日に充たなかっただろう。往きの汽車はM夫人と一緒で、ちょうどその春頃から時々発作的に起るようになっていた病気（後に医者はそれを心臓神経症だと説明したが）のため、上野駅を荷物を持って走りながら、殆ど倒れそうになった覚えがある。M夫人は千ヶ滝の別荘に行くので、僕は軽井沢の駅で別れ、迎えに来ていた中村真一郎と共に、旧軽井沢のベアハウスへ向った。それは東京の夏のあとでは爽かな太陽とつめたい空気と、そして緑の樹々が眼の覚めるように思われる高原だった。

ベアハウスというのは、その頃大学の医学部の学生だった森達郎の持っていた別荘に、僕等が勝手につけた名前だった。森君は濶達な、頗る気前のいい青年で、ずんぐりと肥っていたから多少その動作が熊に似ていた。僕等は達郎と呼ぶ代りに達熊（たつくま）と渾名していた。ベア（熊）ハウスというのもそこに由来している。

旧軽井沢で電車を降り、メインストリートを郵便局のところから左に曲って、林の間をくぐり抜けてから漸く目指す別荘に着いたが、そこの庭先で一人の大柄の青年が、蹲ったまま黙々と木のベッドの手入をしていた。それが初対面の野村英夫だった。たしか森君もそこにいて、中村と四人、腰を下してヴェランダでお喋りを始めた。野村君は癖のない、豊富すぎるほどの

髪を長く延して、その額が如何にも聡明だった。ひどく子供っぽい微笑を真白い歯と共に見せたが、口数は尠なかった。僕がお土産に持って行った罐入のボンボンを、暫くの間に中村が一人で平げてしまったのは確かこの時のことだったろう。僕等は一部屋ずつを占領して（僕のベッドは野村君がそれまで直していたものだった）、それぞれ、それも特に午前中は、自分等の勉強を大事にした。僕は「風土」を書き始めていたし、中村はバルザックの、野村君はジャムの、翻訳に精を出していた。が僕は、仕事よりも軽井沢の町、というより小道から小道を辿って、朝の爽かな空気の中での一人歩きを愉しんでいた。大学を出て初めてのサラリーマン生活で、与えられたこの暫くの自由は何ものにも替えがたかった。

　晌は野村君の妹さんの手を煩わしていたが、昼食が済むと僕等は連れ立って町を歩いた。戦争の始まる数ヶ月前で、国際情勢は既に嶮しくなっていたものの、外人達は我が物顔に町を歩き、テニスをしたり馬に乗って走ったりしていた。この年はまだ何でもあったから、メイジでは牛乳が飲めたし、ブレッツではアイスクリーム・サンデー、菊屋ではババロア、アメリカン・ベエカリではうまいケーキが食べられた。もっとも初任給七十五円の僕にはそう贅沢も出来なかったが。

　そういう午後、僕は初めて堀さんの家に連れて行かれた。オットー独逸大使の宏壮な別荘と細い散歩道を隔てた小ぢんまりした庭の中、その中に堀さんの別荘が正面にヴェランダを見せている。堀さんはスポーティなジャケツ姿で、大抵はこのヴェランダで椅子に凭れて本を読ん

でいられた。

それまでに僕は必ずしも堀辰雄のいい読者であったとは言えない。大学時代に、中村から堀さんのところへ行こうと度々すすめられたが、漸くこの年になって夏に出掛ける決心がつき、試験勉強のようにして堀さんの作品を通読した。しかしこの時の浅い読みかたでは、荷風以後の稀に見る小品作家としての堀さんの資質は直に理解できたが、小説については僕の考えとかなりの違いがあった。従って僕は、必ずしも心酔して堀さんの許を訪ねたわけではない、寧ろ多分に批判的だった。

中村や野村君が活潑に口を利いている間、僕はぼんやりと堀さんのパイプの青い煙を眼で追っていた。堀さんの話振りは魅力的で、軽井沢のよもやまの噂話が僕達を飽かせなかった。作品に魅力を感じる先に、僕は堀さんという人柄にすっかり参ってしまった。多恵子夫人の親切なもてなしも、僕にはまったくアトホームだった。

この初対面の時の印象は、江戸っ子らしい口の利きかたにも拘らず、なぜか僕に旅人としてしるしづけられた。この年の春や秋を、堀さんは木曾路や大和路などへ旅行され、次の年には雑誌に「大和路信濃路」を連載されている。しかし僕の印象はそこから来たのではない。晩年を殆ど病床で過された堀さんは、たとえ病床にあっても、僕にはやはり旅人として感じられた。現にあるものだけには満足せず、心の中に最後まではかない幻を追う人として、——常に旅先にある清々しく洗われた瞳で人生を見ている人として。芭蕉をあげるまでもなく、孤独な旅人

はどのような苦しい流浪の果にあろうとも、常に暖かい魂の持主でないことはない。

日曜日は「木の十字架」のあるカトリック教会に出掛けた。堀さんも時々そこへ顔を出されたらしい。僕等のように（野村君だけは例外だった、彼は後に回心した）、信仰もないのに出掛けて行く連中を「サンマー・クリスチャン」と呼ぶのだそうだ。僕なんか物珍しいので、内部の建築を見たり、信者の外人達を眺めたりしていた。

敬虔なお祈りを捧げている人達の間に十二、三歳の可憐なロシア人の少女がいて、よく小さな弟の手を引き母親に連れられて、メインストリートなどを歩いていた。フランス語で他の外人達と話をしていたので、僕等も何とかして近づきになりたかったものだが。イタリア大使館附武官の娘である少女もいて、野村君の好きなのはこの子だった。年はロシア人の少女と同じ位、やはり小さな弟が一緒で、この男の子はまったく抱き上げてやりたくなるほど可愛らしかった。そしてこの場合にも、結局誰一人友達にはなれなかった。

この年の印象は、翌年の昭和十七年の夏のそれと奇妙に入り混っているから、正確には思い出されない。僕は次の年には長く軽井沢に滞在して、殆ど秋の深くなる頃までいた。しかし戦争は既に始まりいつ召集が来るかも分らなかったし、胸の底には重い苦しみを抱いていたから、この昭和十六年の印象ほどに明るくはない。僕等は皆、英文で書かれた Map of Karuizawa を持っていて、例えば Lost-Ball Lane などというものを、わざわざ探して歩いたものだ。堀さんが一緒の時もあったしそうでない時もあった。川端さんの別荘のある「幸福の谷」の方へも行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c